

## 名作再読、拾い読み (29)

### 『喪服の似合うエレクトラ』(1) ("Mourning becomes Electra") 小澤 文彦

ユージン・グラッドストーン・オニール (Eugene Gladstone O' Neill, 1888-1953) は、20世紀最大のアメリカの劇作家です。ニューヨーク市のホテルで生まれました。両親は共にアイルランド移民の家系で、父はその当時人気があった舞台俳優ジェイムズ・オニールです。母はユージンを出産する際、リウマチの痛みを抑えるためモルヒネに手を出し、麻薬の世界から抜け出せなくなります。そのため、彼は自分の出生が母親を麻薬中毒に追い込んだという罪の意識に囚われ続けました。

彼はカトリック系寄宿学校から、プリンストン大学へ進学しましたが、翌年中退。演劇を観たり詩を書いたりの生活をした後、船員になって6年間航海して過ごします。港で浮浪者生活も経験。自己嫌悪から自殺未遂を図ったりもしました。その後、劇作を始めますが、結核に罹って療養後、ハーヴァード大学で劇作セミナーに参加。1916年にプロヴィンスタイン・プレイヤーズ劇団に加わり、この劇団のために書いた『地平線の彼方』(1920)でピュリッツァー賞を受賞します。その後は、この当時最も広く上演・翻訳されたアメリカの劇作家となり、『アンナ・クリスティ』(1921)、『毛猿』(1922)、『皇帝ジョーンズ』(1921)、『奇妙な幕間狂言』(1928)、『喪服の似合うエレクトラ』(1931)、『ああ、荒野!』(1933)、などを発表しました。その後、健康を害して闘病生活に入り、社会的にも忘れられてしまいます。1936年にアメリカ人劇作家として初めてノーベル文学賞を受賞した時は、入院中でした。ボストンのホテルで65歳で亡くなりますが、最期の言葉は、“I knew it. I knew it. Born in a hotel room, and God damn it, died in a hotel room.”と伝えられています。

晩年は不遇でしたが、死後に発表された『夜への長い旅路』(1956)が上演・発表されると彼への作品と生涯への興味が再燃し、再評価されると共に、近代アメリカ演劇の創始者としての地位が確立しました。

今回は、『喪服の似合うエレクトラ』を紹介します。この作品はアイスキュロスの『オレスティア』三部作を基にしているのですが、先ずこの悲劇のあらすじを見てみましょう。

『オレスティア』はトロイ戦争の後日談で、10

年の戦いの末、漸くギリシア軍が勝利して帰って来たところから始まります。この戦争は、ギリシアのメネラオスの妻ヘレンがトロイの王子パリスに誘拐されたことが発端でした。メネラオスの兄であるアルゴス国王アガメムノンはギリシア軍の総大将としてトロイ攻撃に遠征する際、嵐のために出港できなくなり、予言者の言葉に従って嵐を鎮める為に長女のイフィゲネアを生け贄として捧げざるを得ませんでした。アガメムノンの妻クリュタイメストラは、ヘレンを奪い返す戦いに何故自分の娘が犠牲にならなければならなかったのか、納得できません。激しい憤りが憎しみに変わります。そして、夫の留守中に自分に接近してきたアイギストスと密通する仲となり、彼にそそのかされて夫を殺す計画を立てます。アイギストスの父テュエステスはアガメムノンの父アトレウスの弟で、権力争いに負けて国から追放されていましたが、仲直りを求めて帰国した時にアトレウスから残酷な仕打ちを受けました。宴会でご馳走と出された肉料理を口にしますが、それはいつの間にか殺された自分の息子たちの変わり果てた姿でした。騙された恨みから、彼はアトレウスの家系が滅びよと呪いをかけます。アイギストスは乳幼児だったため難を逃れたテュエステスの末子であり、復讐のためにクリュタイメストラに接近してきた青年でした。

その夜、アガメムノンは湯殿でクリュタイメストラに殺害されます。彼等にはイフィゲネアの他に、エレクトラという娘とオレステスという息子がいました。エレクトラは母が父を殺したことを知り、母の行為を許すことが出来ません。他国に預けられた弟オレステスが成人してから一緒に復讐することにします。数年後に、立派に成人したオレステスが帰国し、姉弟二人で父の仇を討つことに成功しました。

(次号へ続く)

#### 参考文献

呉茂一[ほか]編『ギリシア悲劇全集』第1巻  
(人文書院、1960)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)